

江戸読本の往方

―巴里に眠る読本たち―

高木 元

十年ほど以前からパリに出掛けては、フランス国立図書館版画部 (BnF Est.) に所蔵されているデュレコレクションや、国立図書館とパリ装飾美術館図書室 (BAD) などに分散して所蔵されているトロンコワ・ルボーディコレクション、さらに国立ギメ東洋美術館図書室 (MNAAG Bib.) や、国立言語文化大学共通利用図書館 (BULAC)、国立高等美術学校 (ENSBA) などに所蔵されている和本、とりわけ〈江戸読本〉を中心とした書誌調査を続けてきた⁽²⁾。

フランス以外では、オランダ国立民族学博物館シーボルトコレクションや、ベルギー王立図書館、サンクトペテルブルクのロシア国立図書館、大英博物館などにも足を運んだが、多くの和本が西欧で、現在に到るまで大切に保存されていることに驚かされた。

これらの和本の大半は、十九世紀に来日した熱心な日本東洋学者たちが西欧で紹介した〈絵入本〉や浮世絵に触発

されて、西欧で蒐集されたコレクションを中心としたものである。結果的に、彼等は十九世紀末期の西欧におけるジャポニズムの流行を準備したことになる。

ところで、日本に於ける近世期の出版物の世界史的な特徴は、〈絵入本〉が多かったことにある。浮世絵とりわけ十八世紀に誕生した多色摺の錦絵や彩色絵本の目を見張る美しさは、同時代の世界中に類例を見ないといっても過言ではないだろう。西欧において、油性インクで黒々と印刷された立派な革装の洋本を見慣れた瞳が、板目木版を用いて水彩染料で摺られた錦絵の持つ透明感と和本のしなやかな柔らかさ⁽³⁾とに魅せられたとしても、何等の不思議もない。

一方、巷には多くの大衆小説が錦絵と同様の木版技術を用いて製版本として流布していた。その装丁造本には凝った意匠が施され、さらには錦絵の画工(浮世絵師)が担当した精緻な口絵や挿絵にも、描かれている日本の風俗に関する

る興味も相俟つて、西欧からの訪問者たちは強い感興を催したことであろう。それらを、手に入れて各国へ持ち帰ったものが、現在西欧に遺されている和本群の呼び水となったのである。

フランスの実業家であり、来日したこともある宗教や民俗学にも造詣の深かったエミール・ギメが蒐集した和本を核として、その後ギメ博物館が蒐集した和本群は、現在ギメ東洋美術館に引き継がれて図書室に所蔵されている。⁽⁵⁾ これらも大半が絵入本である。すでに、戦前に書目カードは備わっていたものの、その後、元司書であり現在は館長付顧問をなさっている尾本圭子氏に拠つて追加整備されたが、それでも未だにギメコレクションの全貌は明らかにされていない。目下、現司書の長谷川正子氏が丹念な原本に拠る調査を積み重ねて書目目録を準備されている。その作成過程で整理方法について疑問を呈されたのが本稿で紹介する「読本挿絵集」(仮題)である。

読本の享受史として、明治期の活字翻刻本や講談速記本として利用されたことについては報告したことがあるが、⁽⁶⁾ 貸本屋を通じて流通した板本その物がどうなったかに就い

ては、福田安典氏に拠る調査報告が備わる。明治初年に松山市(愛媛県)で開業した貸本屋・汲汲堂の縁故者から、昭和十一年に愛媛県立図書館に寄贈された板本群は、廃業した同業者から仕入れて形成されたもので、それらは河内屋茂兵衛が求版後印した読本や人情本・滑稽本であること。それ故、此等の貸本が如何に廉価な貸本として大方の娯楽読物として供給され、そして板本としての終着を迎えたかを調査した報告である。⁽⁷⁾

一方、帝國文庫など江戸文学の翻刻叢書を多数出版していた博文館が、明治三十年に原板木(部分的には改刻されている)を使用した板本『南総里見八犬伝』(木箱入り三十七冊に合綴)を出していたことを紹介したことがあるが、⁽⁸⁾ 板本自体は明治期に入っても十九世紀末まで、それなりに商品価値を保持しつつ流通していたものと思われる。

さて、読本は一般的に貸本屋を通じて流通していたジャンルであるから、大名家の奥向⁽⁹⁾や素封家が所蔵していた本を除けば、保存状態の良好な本は皆無である。多くは貸本屋の手に拠つて表紙が変えられたり、本文に裏打したりして改装されている。と同時に、初板初摺に近い善本であったとしても、貸本屋から貸本屋へと転々と流通し、結果的

に夥しい読者の手を経ているが故に、良く読まれた本ほど手擦れなどの痛みがひどく、また落書も多い。場合によっては、手擦れ防止や防虫のために小口や地に柿渋が塗られた甚だ汚らしい本も見受ける。

二十世紀に入って活字本が図書の流通市場を席卷し、貸本屋が廃業していった後の板本は、散逸して次第に端本化し、一部分は古書市場に流通したものの、大半は襖の下張や裏打などに使用されてしまったと想像される。

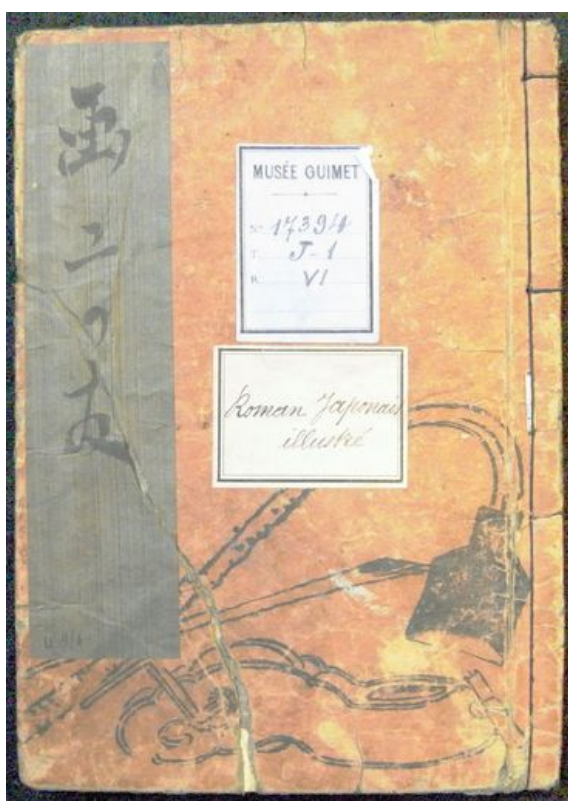
そこで、本稿ではパリに残存している江戸読本の板本の様相についての報告をすることに拠って、二十世紀に入ってから江戸読本の板本の往方の一端に就いて思いを馳せたいと思う。

ギメ東洋美術館に所蔵されている一群の〔読本挿絵集〕は、全部で百五十冊程が確認できた。⁽¹⁰⁾ 〈江戸読本〉を中心として、後期の〈上方絵本読本〉の口絵と挿絵、つまり一般の西欧人には読めない日本語の本文を除いて、取り敢えずは見れば分かる絵の部分だけを抜き出して合冊した半紙本で、各冊には『好古文庫』や『画工の友』などという書題簽が貼付されている。この資料は一定程度まとめて一八九三

年五月頃に、ギメ博物館に拠ってパリで購入された和本だと思われ、受入簿には一律にタイトルが「Roman Japonais illustré」や「Gwa-kô-no-tomo」と記されており、その後も一九〇〇年五月まで断続的に同様の資料を購入したようである。⁽¹¹⁾

具体的な本の書誌を記しておこう。請求番号「17389」が一番若いものであるが、半紙本一冊、『好古□□^(文庫)』(書題簽)が貼付され、下部に当初の整理番号と思しき「434/1」と打付書きされている。と同時に一丁表(以下「一オ」)の上部に、明らかにフランス人が記したと思しき特徴ある書体で「434」以下の数字、すなわち「1」と赤鉛筆にてアンダーライン付きで書かれている。⁽¹²⁾

全十五丁、表紙は浅縹地に紋文様、『朝夷巡嶋記』の表紙を流用した物と思われる。一連の此等の資料と同様に、子持枠を持つ「MUSEE GUMMET」の下に「N. / T. / R.」と三段に印刷された薄紫色のラベルに手書きにより「17389 / J-1 / VI」、もう一つの子持枠が印刷された白いラベルには「Roman Japonais illustré」と手書きされたものが貼付されている。表紙裏は白。



一才上部には円形のギメ蔵書朱印「MUSÉE GUMET / ★ MINISTÈRE DE L'INSTRUCTION PUBLIQUE」(ギメ美術館／文部省)、下部には楕円の受入朱印「BIBLIOTHÈQUE / MINISTÈRE DE L'INSTRUCTION PUBLIQUE / MUSÉE GUMET」が捺され、中に受入番号が手書きされている。

一才は、時に貸本屋本に貼付されているのを見掛けるものであるが、印刷された貸本屋の口上が貼り込まれている。⁽¹³⁾

凡士農工商共、夫々の職分家業に因て、持用の品物を尊み、今日を営事、世上一般也。然るに、近來写本の巻中に聊白紙あれば種々の書人、又は形さへ覚束なき木偶、或は見苦敷男女の陰躰杯画き、君臣父子の中にて面を赤め合事まゝ多し。是等は、必竟一時の興に乗じての戯れならんか。併、其職分の道具へ疵付給ふは僻こと也。著述拙く筆者の誤りあらば、只言語を以て其過を咎め、巻中への戯画楽書は許給へ。貸本常に是を歎き、愁ふること深し。因て諸君子に訴ふる事

三島

以下、見開き毎に通し番号を付して記述し、左右の丁を別

に記述する必要があれば「右」「左」とする。また書名は初出のみ内題を記し、二度目以降は適宜略した。

- ① 『朝夷巡嶋記全傳』初編卷五の挿絵「仇をうち難を避る庄司暁の黎明」(七ウ八オ)
- ② ①左の裏打に『寒燈夜話 小栗外傳』卷四の本文(六オウ)が使用されているが、小口が全部切れているため裏面が見開きになっている。
- ③ 右は『巡嶋記』初編卷五本文中の上下に入れられた挿絵「阿三郎患難許我の里を過る」(十三ウ下半分)、左は右の続きで、挿絵「阿三郎元服して名を朝夷義秀改む」(十四オ上半分)
- ④ 右に『巡嶋記』初編卷五の挿絵「大石山に義秀朔鳥を射る」(二十一ウ二十二オ)のうち二十一ウのみが裏返しに③左と糊付けされている。左は⑤の挿絵と同じ丁の表側で『巡嶋記』三編卷二の本文(五オ)
- ⑤ 『巡嶋記』三編卷二の挿絵「金瘡に苦みて廣光策を遺さんとす」(五ウ六オ)、左の裏打は『小栗外傳』卷十の本文(十四オ)
- ⑥ 裏打された『小栗外傳』卷十の本文(十四ウ)と⑦の挿絵と同じ丁の表側で『巡嶋記』三編卷二の本文(十六オ)

- ⑦ 『巡嶋記』三編卷二の挿絵「羽蟻たつ誰か後の世や捨卒塔婆／東岡舎羅文」(十六ウ十七オ)。以下は挿絵の反対側、本文の丁同士を糊付けしてある。
- ⑧ 『巡嶋記』三編卷二の挿絵「老婆春心公子を苦しむ」(二十四ウ二十五オ)
- ⑨ 『巡嶋記』三編卷二の挿絵「黒萩途に塞玄にあふ」(三ウ四オ)
- ⑩ 『巡嶋記』三編卷三の挿絵「色中餓鬼人間夜叉」(背景薄墨)、「明處有王法暗裡有鬼神」(背景艶墨)(十二ウ十三オ)
- ⑪ 『巡嶋記』三編卷三の本文(十三ウ、二十二オ)、⑩左と⑪右の挿絵と同じ丁の本文同士を糊付けしたものが剥がれたか。
- ⑫ 『巡嶋記』三編卷二の挿絵「元晴智恵吉見主従を知る」(薄墨)(廿二ウ廿三オ)
- ⑬ 『巡嶋記』三編卷四の挿絵「時夏驕て守詮が軍議を折く」(四ウ五オ)
- ⑭ 『巡嶋記』三編卷四の挿絵「時夏生拘られて經任に降る」(艶墨)(十三ウ十四オ)
- ⑮ 『巡嶋記』三編卷四の挿絵「時夏を射て守詮達六を擒す」(平泉の敗軍糠田重正戦死す)(二十ウ二十一オ)

⑬『巡嶋記』三編卷五の挿絵「鵜東二計 信夫莊司が館うとうじはかりごしのぶのせうじに使うつかひ」(三ウ四オ)

⑭右は『巡嶋記』三編卷五の挿絵「圓山の館まるやまに元晴守詮等もとほるもりあきら戦死すせんし」(十三オ十四ウ)の右半分(十三オ)、左は半丁の挿絵「知人の才泰時光仲を薦むちじん さえやすときみつなか すく」(二十六オ)

⑮卷末半丁は⑬左の挿絵と同じ丁の裏側で『巡嶋記』三編卷二の本文(二十六ウ)、左は後ろ表紙見返

後ろ表紙は浅縹地に三つ巴紋文様があり、表紙のツレだと思われる。

やや記述が煩雑になったが、要するに『朝夷巡嶋記』三編の卷二、卷五の挿絵(各卷三函宛)だけを順に抜き出し、挿絵を見開きにして反対側の文字だけの丁同士を糊付けし一冊(14)に改装したものである。

ただし、最初が初編卷五の挿絵であるし、三編卷五も⑬のように右半分だけである上に、原本では次に入っている半丁の挿絵「鳩江にほのえなよたけみち婿竹途むすねに賊兵ぞくへいとたゝかふ」(十七ウ)を欠いている。つまり、一作品の口絵挿絵を順に網羅しようという編集意識は見られない。

次の例は「17474 『画工の友』(書題簽)で、半紙本一冊、浅縹色表紙、下部に当初の整理番号と思しき「434/114」と打付書きされている。

全二十三丁、表紙は浅縹地に紋文様。一連の此等の資料と同様に、薄紫色ラベルに手書きで「17474 / J-1 / VI」、もう一つのラベルには「Roman Japonais illustré」と手書きしたもの貼付。

表紙裏には落書「本屋謹日價高直モ不顧見人甚以馬鹿同前トハ兼テ心得校見過キ料出入稀也\戌年ヨリ改連テ致ス也」。一オは①右丁の表側で『小説東都紫』卷四(十六オ)の本文。上部に「114」と赤鉛筆で書かれ、受入番号(17474)が書かれた楕円の受入朱印と円形のギメ蔵書朱印が捺されている。

①『小説東都紫』卷四挿絵「源八熊くまと挑いどんで力量りきりやうをためす」(十六ウ十七オ)

②右は卷四本文(十七ウ)、左は卷五本文(二ウ)。双方とも挿絵丁の反対側。

③『小説東都紫』卷五挿絵「鷲蔵わしぞう鎌倉かまくらにて木綿もめんを商あきなふ」(二ウ三オ)

④右は卷五本文(三ウ)、左は卷六本文(一オ)、上部に貸

本屋印「長門」「三嶋」

⑤ 『小説東都紫』 卷六挿絵「左司馬瀨川にかよふ」(二ウ二オ)

⑥ 右は卷六本文(二ウ)、左は卷六本文(五オ)

⑦ 『小説東都紫』 卷六挿絵「瀨川左司馬に助太刀を頼む」(五ウ六オ)

⑧ 『忠勇阿佐倉日記』 初輯卷一口絵「近江阿佐倉の郷の長花井當左工門が、一子當吾道雄、島山の近臣遠田嘉門が、女兒衛後に阿千代と改む」(口ノ三ウ口ノ四オ)。艶墨、薄墨。

⑨ 『忠勇阿佐倉日記』 初輯卷一口絵「當左工門が、渾家阿種、花井當左工門道郷、千葉忠蔵恒治」(口ノ四ウ口ノ五オ)。藍色薄墨。

⑩ 右は『忠勇阿佐倉日記』 初輯卷一「總目錄」(口ノ五ウ) 左は『忠勇阿佐倉日記』 初輯卷一の本文(八オ)

⑪ 『木曾義仲 鼎臣録』 卷二挿絵「騰々走馬、響々英士、一雄一鞭、諫而不正」(十八ウ十九オ)

⑫ 右は『鼎臣録』 卷二の本文(十九ウ)、左は同卷三本文(五オ)。

⑬ 『鼎臣録』 卷三挿絵「幽精詫、婦非、狂非、疾、誠忠至心

未然自然」(五ウ六オ)

⑭ 右は『鼎臣録』 卷三の本文(六ウ)、左は同卷三本文(十オ)。

⑮ 『鼎臣録』 卷三挿絵「偕腦乳哺ノ愛、忽慕血脉ノ情」「能守忍ノ一字、深慎義士ノ行」(十二ウ十三オ)

⑯ 右は『鼎臣録』 卷五の本文(十三ウ)、左は同卷五本文(十一オ)。

⑰ 『鼎臣録』 卷五挿絵「剛却而柔、強却而弱、百將可、計、忍之一字」(十一ウ十二オ)

⑱ 右は『鼎臣録』 卷五の本文(十二ウ)、左は同卷三末尾の本文(二十一オ)。

⑲ 『近世説美少年録』 一輯卷五の挿絵「出像第十二、大夫次家族と俱に阿夏母子を欸待す」(十一ウ十二オ)

⑳ 『近世説美少年録』 一輯卷五の挿絵「出像第十三、三少年遊、遊、走、牧、馬」(十八ウ十九オ)

㉑ 『流轉數回阿古義物語』 卷四挿絵「其續」(四ウ五オ)

㉒ 右は『阿古義物語』 卷四本文(五ウ)、裏打に『月宵鄙物語』 卷四本文(一オウ)が使われている。左は『阿古義物語』 卷四本文(十一オ)

㉓ 『阿古義物語』 卷四挿絵(十一ウ十二オ)。薄墨欠

②4 卷末半丁は『阿古義物語』卷四挿絵「三助狐妻の少女郎さんすけきつねつなま狐が毒死どくしを視て愁歎しうたんの体てい」(十八ウ)

黄色地の後ろ表紙が付けられているが、裏側には貸本屋の営業文書(15)が貼られていて、見返から文書の裏側が透けて見えている。

さて、この 17474 は様々な作品が取り合わされているが、作者や挿絵を担当した画工別に編成するというような特別な編集意識も見て取れず、ただ適当に集めて一冊にしたとしか考えられない。使用されている挿絵は全丁が裏打(16)されているわけでもなく、裏打に使用されている紙も、②のように挿絵を採ったのとは別の読本のものであったり、実録写本や営業文書と様々である。付けられている表紙も、手近な適当なものを用いたと思われ、特に本来は表紙(17)として使用されていたものを、穴の向きに合わせて逆様にして(題簽を付けたまま)後ろ表紙として使用しているものもある。

〔読本挿絵集〕に所収されている作品名を、ほぼ整理番号順に列挙してみる。(16)

朝夷巡嶋記・開卷驚奇俠客傳・小説東都紫・月霄鄙物

語・左刀奇談・復讐譽通箭・景清外傳松の操・俊寛僧都
嶋物語・繪本金花談・南朝外史武勇傳・繪本金毘羅神靈
記・報仇 奇談自来也説話・浄瑠璃媛物語・芳薫 好話高木迺實傳・俊
傑神稻水滸傳・繪本烈戰功記・繪本西遊全傳・阿旬殿兵
衛實實記・善知安方忠義傳・繪本復仇英雄録・南總里見
八犬傳・占夢南柯後記・流轉 數回阿古義物語・繪本忠臣蔵・
夢想兵衛胡蝶物語・優曇華物語・姉昔根 弟孝太郎孝子嫩物語・本
朝悪狐傳・美濃舊衣八丈綺談・繪本昔語松虫墳・繪本
報仇誓うかひのをひづる笛摺・繪本白狐傳(阿也可志譚)・松浦佐用媛石
魂録・繪本楠公記・青砥藤綱摸稜案・繪本通俗三國志・
新編水滸畫傳・寒燈 夜話小栗外傳・報讐奇話那智の白糸・唐
金藻右衛門金花夕映・嫩髮蛇物語・濡燕栖傘雨談・通俗
排悶録・勇婦全傳繪本更科草紙・昔語茨之露・道成寺鐘
魔記・近世説美少年録・鎌倉 外傳繪本平泉實記・近世 新話雲乃晴
間雙玉傳・天竺 得瓶仙桂奇録・假名 手本後日之文章・山榊大夫後
編古意今調録・椿説弓張月・復仇越女傳・玉石童子訓・
刀筆青砥石文鸞水箴語・繪本彦山權現靈驗記・繪本壁
落穂・絲櫻春蝶奇縁・雲妙間雨夜月・忠孝潮來府志・忠
勇阿佐倉日記・木曾 義仲鼎臣録・忠孝 節話雲井物語・伊勢 日向寄生木
草紙・その、ゆき・繪本伊賀越孝勇傳・葦牙草紙・文覺

上人発心之記橋供養・西國 順禮幼婦孝義録・頼豪阿闍梨恠鼠
傳・繪本淺草靈驗記・新続古事談・繪本雪鏡談・繪本合
邦辻・繪本佐野報義録・星月夜顯晦録・豪傑勳功録・名
勇發功談・楳精奇談魁草紙・源平外記染分草・源氏一統
志・斐隄匠物語・稲妻表紙後編本朝酔菩提・烈戰巧記・
雙蝶記・復讐二見浦・新田義統功臣録（繪本璧落穂の改題
本）・繪本甲越軍記・月氷奇縁・古實今物語・小幡小平
次死靈物語復讐安積沼・繪本太閤記

一瞥を加えただけでも、文化以降の江戸読本と上方絵本
読本の大半が網羅されている様子が見て取れる。これは、
そのまま十九世紀の貸本屋における江戸読本の蔵書構成を
反映していると見做すことが出来よう。

さて、このような読本の挿絵だけを綴じ合わせた資料は
国内では余り見かけない。では、誰が何時このような「読
本挿絵集」を作成して西欧にもたらしたかという疑問が生
じる。

此処まで見てきたように、印記や手擦れ等の状態から
貸本屋旧蔵本を用いて造本されたことは確実である。それ
故、摺りの状態は区々で必ずしも後印本ばかりではないが、

保存状態の良好なものは少ない。

「好古文庫」「画工の友」という書題簽は毛筆行書体で書
かれており、日本で作成されたものだと思われる。この題
簽が剥離して、原題簽や、原題簽が剥離した上に打付書き
された外題、または貸本屋が書いた題簽などが現れたもの
が少なくない。つまり、貸本屋本に貼られていた題簽の上
から「好古文庫」「画工の友」という題簽が貼付されてい
るのである。これら一連の改装作業は日本で行われたと考え
るのが自然である。

「読本挿絵集」には「三嶋」や「長門」という貸本屋印が
捺された本が多い。営業文書で裏打されている本にも彼等
の蔵書印が捺されていることから、三嶋^某、または長門（吉
兵衛¹⁷）という貸本屋の旧蔵書がこの「読本挿絵集」の基礎に
なっていると考えられる。

つまり、明治期に入って十九世紀も終わろうとしている
頃、廃業した貸本屋本が古本として出回った際に、日本の
業者の手で輸出用に作成されたものであると推測できるの
である。折りしもジャポニズムの流行で西欧の市場では日
本の絵入本や錦絵が売れていたからである。

現存する西欧のコレクションでは、読む部分の多い読本

より、見た目の品が良い絵本（狂歌絵本など）や錦絵の方が多数見受けられるようである。しかし、読本の挿絵も浮世絵師が担っていたわけであるし、何より極東の島国である日本の歴史風俗を描いた絵画資料、ないしは絵本として鑑賞されたものであろう。一連の「好古文庫」や「画工の友」という命名は、その享受のされ方を良く表していると思われる⁽¹⁸⁾。

さて、ギメ東洋美術館にこれだけ大量に保存されているということは、かなりの「読本挿絵集」がヨーロッパに渡っていると考えられる。管見の範囲では、ベルギー王立図書館の蔵書にも読本に混じって、挿絵だけを綴じ合わせた同様の本が四点ほど見出された。

・「好古文庫」四 (FS XLI 353) と打付書。『畫本信長記』初編卷八 (二ウ三オ) などと『阿古義物語』卷二 (三ウ四オ) を所収。

・「本朝武藝」六 (354) と打付書。『畫本信長記』初編卷八 (十五ウ十六オ) など所収。

・「繪本画工艸帛」十七 (576) と打付書。『忠孝潮来府志』卷四などを所収。

・「好古文庫」七 (609) と打付書され、『繪本龜山話』卷六と『繪本西遊記』卷八を所収。

「好古文庫」という書名が共通するのみならず、同王立図書館蔵の『新編水滸画傳』(236)には「長門」、『椿説弓張月拾遺』卷五(238)には「長門」「三嶋」「本清」の蔵書印が捺された上に見返には「三島の口上」が貼付されている。つまり、西欧にもたらされた読本や「読本挿絵集」はパリのみならず、各国の様々なコレクションに分散していたものと思われる。

しかし、和本の整理や目録作成には崩し字解読や書誌の知見が不可欠である上に、この手の「読本挿絵集」などは図書館などでは整理の仕様がなく、未整理の俣で放置されている可能性がある。今後、それらの調査が進み、「読本挿絵集」に関する今少し具体的な様相が知れるようになると思われる。

江戸読本にとって口絵挿絵の評判が売行に大きく影響を与えていたことは知られているが、明治期に国内で貸本屋本としての役割を終えた板本たちが、絵入本であったが故に西欧に渡って生き残っていたわけである。あらゆる事が

国境を越えてグローバル化しつつある時代に、一五〇年前に西欧に渡った本が、大切に保管され続けていたことは驚嘆に値することではないかもしれない。しかし、日本の文化遺産が海外の人々の目によって評価され保存され続けていたことは、日本の古典遺産の意義が、偏狭な国粹主義(美しい日本の文化は日本人にしか理解できないという説)などとは无缘であることを証しているものだと思われる。

注

- 1 旧パリ東洋語図書館(BULO)。二〇〇六年に国文学研究資料館から和本の目録が出されている。
- 2 これら一連の調査は、フランス国内に所蔵されている和本に関する調査研究を精力的に続けてこられたクリストフ・マルケ氏(フランス国立東洋言語文化研究院(INALCO)教授・日仏会館フランス事務所所長)の主導によるものである。「E・トロンコワの和本科レクション―19世紀フランスにおける江戸出版文化史を構築する試み―」(『日仏美術と文学の交流』、思文閣、二〇一四)参照。
- 3 ルネッサンスにおけるグーテンベルグの活版印刷術の開発以後、西欧では大文字小文字のアルファベットと約物という限られた文字セットを鋳造するだけで、あらゆる書物が印刷出来るようになり、広く印刷された書物が普及した。この時に金属活字と一緒に用いられた木口木版に抛るイニシャルキヤップや、(同時代の日本の書物と比較すれば数は多くはないが)木口木版に抛る挿絵は、あたかも銅版画と

見紛うばかりの精緻な線画を印刷可能にした。しかし、十九世紀末には西欧では錦絵に刺激を受けて木目木版と水彩絵具を用いた印刷が試みられ、逆に日本では活版に画図を入れるために木口木版や銅版、石版の技術が輸入された。十九世紀末に奇しくも起こった日仏の印刷技術交流は大変に興味深い現象である。

なお、この現象に就いては、シンポジウム「日仏の出版文化の出会い―幕末から両大戦間まで」(二〇一三年九月二日、日仏会館)におけるフリーツプ・ル・ストウム氏(ブルターニュ県立美術館館長)に抛る基調講演「一八八〇〜一九三〇年のフランスの木版表現にみられる浮世絵の影響、そして出版」に多大な示唆を受けた。近日、このシンポジウムに基づく論文集が刊行される予定である。

- 4 ギメ自身がリヨンに創設し、一八八五年にパリに移設された後、一九二七年十月の政令で国立美術館総局下におかれることになり「ギメ東洋美術館」となった。ギメの行跡についてはフランシス・マクワン氏と尾本圭子氏との共著『日本の開国 エミール・ギメあるフランス人の見た明治』(『知の再発見』双書、創元社、一九九六)参照。
- 5 図書館の創設時はエミール・ギメの蔵書三万冊の寄贈からはじまった由、尾本恵子氏より御教示いただいた。ただし、この三万冊のうち何冊の和本が含まれていたかは不明。

- 6 高木元『江戸読本の研究』(ベリかん社、一九九五年)。
- 7 福田安典「江戸戯作の行方―伊予の貸本屋をめぐる―」(『国語と国文学』八三・五、二〇〇五)。
- 8 高木元「江戸読本の後摺本と活版本」(新日本古典文学大系《明治編28》『国木田独歩・宮崎湖処子集』月報「明治出版雑識19」、二〇〇六、岩波書店)など。
- 9 松野陽一氏に抛り発見されて保存措置が講じられた上で、さらに目録が整備された南部松平家旧蔵書は、現在、八戸市立図書館に所蔵されている(『読本事典』、笠間書店、二〇〇八、参照)。松野氏が「出板時

に江戸屋敷で購入された」といわれる摺りも保存も良い読本の善本を多数蔵している。しかし、テキストの編毎に一冊に合冊されているため、厚冊になってノドが開かずに読みにくいものが多い。その改装に際して、少なからず原表紙と原題簽や見返などが失われているのが残念である。大名家蔵書に多く見受ける合冊処理は、紛失を畏れてのものであろうか。貸本屋大惣の旧蔵書のように合冊されているものも存するが、一般に貸本屋本は一冊単位の見料で稼いでいたので、適当に分冊してしまうことが多いと思われる。

10 現在、整理が進行中であり、今後も出現する可能性があるのですが、調査の終わった現時点における概数である。

11 司書の長谷川正子氏が保存されていた受入簿を確認した上で、御教示下さった。整理番号が連続していない部分には他の絵入本などが受入れられているようであるが、同様の「読本挿絵集」は数度にわたって断続的に受け入れられている。

12 この整理番号は「434/1」～「434/118」まで続いている。一部16, 33, 43, 49, 51の順番が受入簿と一致せずに、少し後の受入番号が付与されている。また9, 19～20, 39, 44～48, 50, 55, 72～79, 87, 90, 97～98, 102, 109は見当たらない。読本挿絵集として抜き出されたこれらの本以外の本に付されている可能性も考えられる。

13 この文章は一部分を変更して改刻され使い回されていたものと思われる。最後の「貸本」の部分が「小山堂」とあり、末尾に「癸卯秋鷹石山人識」とあるものが「画工の友」(17394など)の後ろ表紙見返に貼付されている。なお、翻刻に際して句読点を補った。

14 剥がれているところや、最初から糊付けしていないと思われる箇所も散見される。

15 鈴木俊幸「貸本屋の営業文書」(「中央大学文学部紀要〈文学科〉」九三、二〇〇四)で紹介されているように、貸本屋が営業文書の反古を用いて

所蔵している貸本の裏打ちすることは珍しくなかった。ギメの「読本挿絵集」にも多くの痕跡を見いだすことが出来る。

16 タイトルは内題に抛り、編(輯・集)数は省略した。本来ならば、作者や画工、刊年や板元名なども付記すべきであるが割愛した。また、全貌を明らかにするために此処で書目を掲出すべきであるが、紙幅の関係で割愛し、「語文論叢」二十九号(千葉大学日本文化学会、二〇一四年七月)に掲載する予定である。

17 17452の落書に抛る。

18 西欧では世界各地の古い絵葉書が好んで蒐集されてきた伝統があり、これと通ずるものがあるかもしれない。

【付記】本稿は、ギメ東洋美術館図書室司書の長谷川正子氏の御厚意に抛り成ったものです。毎年お邪魔する度に、整理途中の資料から該当する資料を探し出して調査を許されたのみならず、多くの御教示を忝くしました。また、本稿の発表と写真の使用とを許された図書室長のクリスチーナ・クラメロット氏にも心より感謝申し上げます。